ようこそ櫛田桔梗とイチャコラできる部屋へ

しゅー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ようこそ実力至上主義の教室への世界へ転生を果たしたが、何故か東京都高度育成高等学校を卒業した後だった。

せっかく色々と能力を貰ったり、好きなキャラである櫛田桔梗がお兄ちゃんと呼んで慕ってくれてベタ惚れということにしてもらったのに意味がない。

買い物をした帰りに櫛田を見かけ、悲しそうにしていたために家に案内すると、なんと学校を退学になってしまったようだ。

親にも見切られてしまい住むことすらないので、俺の家に住むように言う。

そこで惚れているのをいいことに、櫛田にイチャイチャしたりエッチなことをしていく。

基本的に原作キャラは櫛田以外出てきません。

そしてあえてオリ主の名前は出さないことにします。

櫛田が好きな人に楽しんでもらうための小説になっております。

目次

1話 …… 1
2話 …… 5
3話 …… 10
4話 …… 14
5話 …… 19
6話 …… 23
7話 …… 27
8話 …… 30
9話 …… 34

1話

「何でこうなった……？」

春風が心地好い季節なのに、俺は買い物帰りにため息をついた。

それは何故か……せっかく好きなラノベである『ようこそ実力至上主義の教室へ』の世界に転生したが、目が覚めたら既に二十歳になっていたからだ。

これではよう実の世界の舞台である東京都高度育成高等学校に通えない。

神様から転生特典で色々と能力を貰ったのに……能力使って学校の美少女にエロいことすることができない。

一応この世界で生きていたということになっており、俺は櫛田桔梗の幼馴染みという設定になっている。

しかも俺のことをお兄ちゃんって呼んで慕ってくれていてベタ惚れ状態……なのに会うことができない。

全くもってこの世界に転生した意味が……。

「え？　櫛田桔梗？」

肩まである亜麻色の髪、キャラメル色の大きな瞳、シミ一つない綺麗な肌はどう見てもあの櫛田だ。

高等育成高等学校は在学中、敷地内から出ることが許されないので、敷地外にいるのはおかしい。

部活の試合などで外に出ることはあるが、櫛田はどこか部活に入っているわけではなかったはずだ。

何でこんなとこにいるのだろうか？

そもそも高校に入学していない？　いや、年齢差を考えると、もう入学しているはずだ。

それどころか二年生に進級していないとおかしい。

しかも制服じゃなくてニットタイプのトップスにミニスカートと私服だ。

「お、お兄ちゃん？」

櫛田と目が合い、大きな瞳が見開かれる。

俺のことをお兄ちゃんと呼んだことから、きちんと櫛田の幼馴染みとして記憶があるようだ。
「お、お兄ちゃんだよね？　私、桔梗だよ」
「えっと、わかってるんだけど、高度育成高等学校に入学したって聞いてたから……」
「そうなんだけど……」
櫛田の顔が曇ったことから何かあったことは確実。
「どこか落ち着ける場所で話そうか？」
「う、うん」
俺は櫛田を連れて自分の家に向かった。
☆
「ここがお兄ちゃんの部屋……」
昔に良く一緒にいた影響なのか、櫛田は抵抗なく俺の部屋に入った。
俺はこの世界では一人暮らしをしており、間取りは１ＬＤＫ。
「お茶を入れるからソファーにでも座って」
「うん」
俺は冷蔵庫からお茶を取り出して、櫛田の元に持っていく。
喉が渇いていたのだろう、コップに入ったお茶を一気に飲み干した。
「何で外にいたの？　在学中は出れないんでしょ？」
「そ、それは……」
再度、櫛田の顔が曇る。
外にいることから大体予想がついているけど、念のために櫛田の口から聞きたい。
「あのね……私、退学になっちゃったの……」
「退学？」
「うん……」
やっぱり俺の予想通りだった。
俺が持っている知識はラノベの１１．５巻までで、その先は知らない。

原作の主人公である綾小路清隆（あやのこうじきよたか）は櫛田を危険と判断し、退学させると言っていた。
だからそのせいで退学になってしまったのだろう。
「それでね……高校も卒業できないのと、中学のこともあって、お母さんたちに見切られちゃって……」
櫛田は中学の時にクラスを崩壊させた過去を持つ。
生理的に無理な人でも仲良くしていた櫛田は相当ストレスを溜め込んでいた。
そのストレスをブログで暴言をはくことでストレスを発散しており、それがクラスメイトにバレた。
ブログについて問い詰められたが、櫛田はありとあらゆる秘密を暴露。
それで教室内は暴動が起こってしまい、クラスが崩壊した。
そのことと高校すら卒業できないから、親はもう面倒を見たくないと思ったのだろう。
「私は……もう行くとこがないの……」
櫛田の瞳には涙が浮かんでいる。
今まで学生だった未成年の櫛田には、親のスネをかじらないと生活は厳しいだろう。
寮も実家も追い出されてしまったのだから、住む場所すらない。
「なら、ここに住むか？」
よう実の世界の舞台である高度育成高等学校に入学できない以上、俺は櫛田以外の人と絡むことができないだろう。
唯一絡むことができる櫛田には、ここから離れてもらっては困るのだ。
「いいの？　私の本性は知ってるよね？」
まるで天使のような振る舞いをしている櫛田であるが、本性は極度の承認欲求の持ち主で、傲慢で利己的。
「うん。実は俺にベタ惚れだってこと」
「そ、それは……」
櫛田の顔が一気に紅潮し、少し恥ずかしそうにしている。

「一番大事な時に一緒にいれなくて悪いな」
俺は櫛田を抱きしめ、自分の胸に彼女の顔をうずめさせた。
一番大事な時期とはもちろん櫛田が中学の時。
神様によってこの世界で生きたという記憶を植え付けて貰ったのだが、俺は高度育成高等学校の卒業生ということになっている。
卒業後はここで一人暮らしを始めて、櫛田に会うことがなかった。
子供の頃の櫛田は俺に誉められたいという気持ちが強く、そのために頑張っていたようだ。
でも、俺が櫛田の側から離れてしまったために、中学では周囲から没落……結果的にクラスを崩壊させてしまった。
恐らくは俺が櫛田から離れなければ、こんなことにはならなかっただろう。
本当に記憶の中の俺は何やってるんだ？　とツッコミたくなってしまう。
こんな可愛い女の子に惚れられているのだから、付き合えば良かったのに。
「本当だよ。責任取って私から離れないで」
「ああ。ずっと一緒にいるよ」
俺たちは見つめ合うと自然に距離が縮まって……産まれて初めてのキスをした。

2話

「んん、んちゅ……」
産まれて初めてのキスは熱くて柔らかく、とても甘い味がした。
「お兄ちゃん……」
うっとりとした表情になり、櫛田は俺の身体に自分の身体を擦りつけてくる。
女性特有の甘い匂いや感触などが俺の本能を刺激してしまう。
「私で興奮してくれてるんだ。嬉しい……」
魅力的な身体を押し付けられて興奮しないわけもなく、俺の息子は服の上から主張していた。
転生前は櫛田が出てる同人誌を見て何度抜いたことか……。
「するよ。桔梗の身体は凄い魅力的だから」
胸は大きいのに腰などは細く、外見だけなら完璧。
そんな身体が押し付けられているのだから、自然と勃起してしまう。
「昔は妹にしか思われてなかったけど、もうそうじゃないんだね」
あの時の櫛田……桔梗は小学生だったから性的な目で見るなんてことはできない。
でも、今は成長してこんなにも俺の性欲を刺激する。
恐らく押し倒しても一切抵抗せずヤらせてくれるだろうが、もう少しだけ我慢する。
「もちろん。先にキスをしちゃってから言うのも何だけど、俺と付き合ってくれるか？」
もう俺から離れられないというのはわかっているが、この先も離れさせないようにする必要がある。
俺に惚れているのだから、付き合ってしまうのが手っ取り早い。
そして桔梗を俺に依存させる。
「うん。嬉しい。私をお兄ちゃんの彼女にしてください」
こうして俺と桔梗は恋人同士になった。
「付き合って早々に悪いんだけど、俺の勃起が収まりそうにない」

未だに身体を擦りつけているのだから、ずっと勃起したままだ。
「いいよ。お兄ちゃんの全てを私にぶつけて？」
俺のことをずっと想い続けてきた桔梗は、既に覚悟は出来ているようだ。
「ずっとお兄ちゃんのために初めてをとっておいたから……」
桔梗は誰とも付き合わず、俺と再会できた時のために誰にも股を開かなかった。
これから桔梗の処女を貰えるのだから、俺にとって嬉しいこと。
もっと依存させて、俺から離れられなくさせよう。
「じゃあ今から桔梗の全てを貰うから」
「うん。私の全てをお兄ちゃんにあげるね」
俺は桔梗にキスをしながら、神様から貰った能力を発動させる。
「んん、んちゅ……じゅる……れろ……」
舌を絡めて濃厚なキスになると、桔梗は身体をビクッと震えさせた。
これは能力が効いている証拠で、その能力とは俺がすることは全て快感に変換されるというもの。
前世で童貞を拗らせてしまった俺は、もちろん相手を絶頂させるテクニックなんてない。
でも、快感に変換されるのであれば別だ。
事実、桔梗はキスだけで絶頂を迎えようとしているくらいに感じている。
「んんん――んちゅ……じゅる……んんんん……」
本来、キスだけではあり得ないくらい大きく身体を震えさせ、桔梗は初めての絶頂を迎えた。
力なく俺にもたれかかってきた桔梗の表情は蕩けており、完全に発情している。
キスだけでこんなになってしまっては、この先のことは大丈夫なのだろうか？
最後までしたらイき狂ってしまいそうだ。
薬みたいに変な風になるなんてことはないだろうが、快感には溺れ

るだろう。
「続きはベッドでしようか」
俺は桔梗を抱き抱えて、寝室に移動した。
すぐにベッドに押し倒して、そのまま桔梗にキスをする。
今度はたっぷりと唾液を送り込みながら、それを飲ませていく。
「んちゅ……じゅるる……んく……ふぁん……」
キスをしながら胸を揉むと、力を入れた分だけ指が沈みこむ。
桔梗の胸はとても柔らかく、これだけで病みつきになってしまいそうだ。
服の上からでは我慢できなくなって捲りあげると、前に画集で見たことがあるオレンジ色のブラが姿を表した。
「あ……お兄ちゃんに見られるのなら、もっと可愛いのにすれば良かった……」
「充分に可愛いよ。もっと可愛いのがあるなら、次の楽しみにとっておく」
「うん……やぁん」
ブラも捲りあげ、大きく育った胸を見る。
大きいから垂れてるかと思ったがそんなことなく、ピンク色の乳首はとても綺麗だ。
俺がガン見しているからか、桔梗は顔を真っ赤にしている。
「桔梗の胸を貪り尽くす」
「うん……ひゃぁん、あ、あん……」
乳首を口に含み、もう片方は手のひら全体で揉んでいく。
服の上からでは比較にならないほど感じており、喘ぎ声を出す。
乳首はツンと勃起しだして、俺は貪るように桔梗の胸を触ってしまう。
「あ、あぁん……ひぃ、ひゃぁぁん」
一際強く乳首に刺激を与えると、桔梗は身体を反らして絶頂に達した。
全てを快感に変換する能力は本当に凄く、恐らく桔梗はセックス依存症になる。

他の人のとこに行かれては困るが、桔梗は俺にも依存するから問題はないだろう。
そもそも他の人にはここまで快感にさせることはできないのだけど。
「えへへ。お兄ちゃんに胸だけ触られてイかされちゃった」
愛する人に絶頂させられたからか、嬉しそうにする桔梗。
アニメやイラストなんかより断然可愛く、俺も依存してしまいそうだ。
「こっちはどうなってるのかな？」
「え？　ひゃぁん」
スカートの中に手を入れてショーツ越しに触ると、お漏らしをしたかと思うくらいに濡れていた。
濡れていることがバレて恥ずかしいのだろう、これ以上ないくらい顔を赤くしている。
ここまできたらショーツは邪魔なので脱がし、思い切り足を開かせた。
「変じゃないかな？」
「とても綺麗だよ」
元から毛が少ない膣が俺の目の前に。
全部剃られているわけじゃないが丁寧に処理をされているため、膣が丸見えだ。
「桔梗はオナニーしたことあるの？」
「それは……お兄ちゃんを想って何回かは……でも、処女膜はお兄ちゃんに破ってほしかったから、中に入れてないよ」
本当にあんまりしていないのだろう、綺麗なピンク色の膣。
見られるのも快感に変換されている可能性があり、膣内からは愛液がどんどんと溢れてくる。
「そか。じゃあ、膜を確認しようかな」
「うううぅ～……嬉しいけど、恥ずかしいよぉ……」
初めて見られたのだから、恥ずかしくても仕方ない。
桔梗の膣にはきちんと膜があり、処女だというのがわかる。

もうすぐ俺が破るからなくなってしまうが、本人がそれを望んでいるから遠慮なく処女を貰わせてもらう。
「もう入れても良さそうだけど、少しは弄っておこうね」
「え？　ひゃぁぁぁん」
桔梗の膣を舐めて、溢れ出た愛液を口に含む。
少し舐めただけで左右の肉びらが開き、ヒクヒクと膣を震わせた。
「ひゃ、はぁぁん……やん、ひぃぃ……」
舐めても舐めても愛液が溢れてきて、それに伴いエロい匂いが俺の脳を刺激する。
舐めるだけではもの足りず、勃起したクリトリスの皮を剥かせてから噛みつく。
「ふあぁぁぁぁぁぁぁん……」
一番敏感な箇所なのだろう、噛みついただけで絶頂に達してしまう。
「これ以上は我慢できないから、桔梗の処女を貰うね」
「うん。嬉しい……ようやくあげれるよ」
俺は桔梗の前に大きくなった息子を出した。

3話

「これがお兄ちゃんの……大きい」
俺の肉棒を見た桔梗が驚いている。
桔梗も思春期の女の子だから、検索して画像などで見たことがあるのかもしれない。
それと比較したようだ。
どこから見ても日本人の平均より大きく、処女の人の中に入ったら痛みしかないだろう。
でも、全てを快感に変換されるから、一気に入れても問題はない。
「これから桔梗の中に入るよ」
「うん」
俺たちは服を全部脱いでから、入れる前にキスをした。
「んん……はぁん」
すぐに入れるようなことをせず、割れ目に沿って肉棒を擦りつける。
「やぁん……早く入れてよぉ……」
発情しきっている桔梗には、これだけでは物足りない。
早く膜を破ってほしそうに、瞳をウルウルとさせている。
「何をどこに入れてほしいの？」
俺はどうやらSのようで、桔梗にエロい言葉を言わせたい。
だからあえて入れず、桔梗が我慢できなくなるのを待っている。
そういう俺ももう我慢できなくなってきていて、いずれ挿入するだろうが。
「それは……その……んん……」
「言ってほしいな？」
発情していても恥ずかしいのは変わらず、桔梗は「うう～……」と悶えている。
でも、俺に言われたら、何があっても言うしかない。
「その……お兄ちゃんのおちんちんを……わたしのおまんこに……入れてください」

「良く言えたね」
軽くキスをしてから、俺は小さな穴に狙いを定める。
「あ……が……」
ゆっくりと挿入していくと、桔梗の顔が痛みでひきつった。
膣内はかなり狭く、中々入っていかない。
巨根が処女の膣に入っていくのだから、当たり前ではあるのだけど。
「あ、あ……ひゃ……ふひゃぁぁぁん」
ゆっくりは面倒になったので処女膜を破り一気に挿入すると、桔梗は腰を大きく浮かせた。
「い、入れられただけでイっちゃったよぉ……」
いくら快感に変換させると言っても、入れた瞬間に絶頂するとは思わなかった。
でも、快感になっているのであれば、初めてだからって遠慮する必要はない。
「全部入ったから」
「本当？　嬉しい」
綺麗な瞳からは一筋の涙。
それは痛みから出たのではなくて、愛する人に初めてを捧げられた悦び。
今の桔梗は幸せで溢れているだろう。
「じゃあ、動くから」
「うん。ひぃぃ……ひゃぁん、あ、あぁん……」
早速腰を動かすと、桔梗は大きく喘いだ。
結合部からはグチュグチュとエロい音をたて、愛液と処女喪失のために出てきた血が出口を求め溢れてくる。
膣内は熱くてとても気持ち良く、突くのを止めることができない。
本能がこの女を犯しつくせと言っているようにも思えるくらいだ。
「ひゃん……痛いのに、気持ち良くて……ひぃ……変になる……あぁぁん……」
本来なら痛みで気持ち良くなんてならないだろうが、快感に変換さ

れた桔梗はまるで電気が流れたかのようにビクビクと震えさせている。
今の桔梗の身体は気持ち良さを求めるとともに、お兄ちゃんに孕まされたいとしか思っていないだろう。
俺も桔梗に種付けしたいという気持ちが支配しており、激しく腰を振っていく。
「ふぁぁ……イく……ひゃん、ふあぁぁぁぁん」
潮を吹いて激しく絶頂する桔梗だが、俺は抽送を止めることはない。
「ひぃ……また、イく……あ、あぁぁぁん――ひゃん、ひゃぁぁぁん」
絶頂したばっかであるけど、再度絶頂に達してしまったようだ。
「だめ……イくのが止まらない……止まらないのぉ……イくぅぅぅ」
完全に快感に溺れてしまったようで、舌を出しながらアへ顔を晒す桔梗。
四肢は指先までピンと伸び、イき狂ってしまっている。
まるで媚薬でも盛られたかのように感度が上がっており、桔梗の絶頂が止まることがない。
「そろそろ出すから」
「ひゃい、らして……ふぁん、お兄ひゃんの精液……いっふぁいらして……」
もう呂律が回っておらず、桔梗はまるで薬中のようになっている。
快感に変換される能力恐るべし……。
「ほら、孕め」
「ひゃん、孕む……お兄ひゃんの精液で孕みしゃいのぉ……イ、イくぅぅぅぅぅぅ……」
桔梗が絶頂したと同時に、鈴口が爆ぜた。
神様から貰った能力の一つである大量射精で、桔梗の膣内を満たしても出続けている。
「あしゅい……お兄ひゃんの精液がたくしゃん私の中に……あぁん、またイくぅぅ……」

精液を出させる快感で、また桔梗は絶頂してしまう。
１０秒以上たっても止まることのない射精は、さらに桔梗を絶頂させるには充分すぎた。
「せっくしゅ気持ちいい……お兄ひゃんとのせっくしゅ好きぃ……」
セックス依存症の人が誕生した瞬間であった。
長い射精を終えて肉棒を抜くと、大量の精液が膣内から溢れてくる。
「溢れるのやぁ……全部中に入れるのぉ……」
溢れてきた精液を指を使い中に戻していく桔梗。
「お兄ちゃんのおちんちんで私のおまんこ塞いでよぉ……」
妊娠したいのか、溢れてこないように入れてとおねだりしてくる。
「いいけど、俺から1秒たりとも離れないでね」
そんなことを言ってしまうあたり、俺は桔梗のことを独占したいのだろう。
「うん。ずっと離れない。だからいっぱい私を愛して?」
桔梗にとって俺に独占されるのは嬉しいようで、もう完全に依存したと言ってもいい。
「ふぁ、ふあぁぁぁぁん」
挿入した瞬間にまた絶頂に達した。
「今日はこのまま繋がったままでいようか」
「はぁん……お兄ちゃんとずっと一つとか嬉しいよぉ」
俺とずっといれる悦びで、桔梗は再び涙を流した。

4話

桔梗を抱いた次の日の朝。俺は彼女の実家に電話をした。
いくら感情に任せて桔梗を追い出したと言っても、落ち着けば親は子供のことを心配するものだ。
捜索届けなんかを出されてはたまったものじゃないから、電話するのは必須。
元々面識があったためか、桔梗の親はすんなりと同棲を認めてくれた。
これで本当にずっと一緒にいることができる。
「可愛いな」
何もかもが整いすぎた容姿。
昨日はイき狂って疲れたから、桔梗はぐっすりと寝ている。
寝ていても俺の手を離すことなく、本当に幸せそうな寝顔。
昨日はいっぱい抱いたし、今日はどこか出かけるのもいいかもしれない。
桔梗が暮らすための生活用品なんかを買う必要があるし。
「んん……お兄、ちゃん？」
どうやら起きたようで、桔梗は寝惚け眼で俺のことを呼んだ。
「おはよう」
俺は寝惚けている桔梗の目を覚ますためにキスをする。
もちろん寝起きなので、軽めのキス。
「おはよう、お兄ちゃん……」
キスを終えると、桔梗の顔が真っ赤に染まっていく。
恐らくは昨日のことを思い出しているのだろう。
あんなにイき狂って俺のことを求めたんだし、正常の思考に戻り恥ずかしくなったのだ。
桔梗も初体験であんな風になるなんて、思ってもいなかっただろう。
昨日は体力が尽きてそのまま寝てしまったため、お互い裸だ。
「今頃、俺の精子が桔梗の卵子に向かってるかな」

桔梗の下腹部を触る。
「うん。そうだね……」
そんなことを言いながらうっとりとした表情で、桔梗は俺の手に自分の手を重ねた。
正常な思考であっても、妊娠したいという気持ちがあるようだ。
「桔梗、これを飲んで」
俺はベッドの下からある物を取り出す。
「これは……？」
「アフターピル。副作用もないから」
これは転生した時に貰った物で、桔梗には妊娠しないように飲んでもらう。
他の人より精子の量が多い俺は、普通のアフターピルでは効果が薄くなる。
だから神様から半永久的に貰えることになった。
そのうち妊娠させるが、今はセックスを楽しみたいのでさせない。
「ねえ……何でこんなのを持っているのかな？」
「何でって言われても、生でしたかったから持ってるだけ」
俺の気のせいであればいいのだけど、桔梗の瞳から光が失われているような……。
しかもいつもの猫撫声と違って完全に地声。
「本当にそれだけ？　実は私以外の人としたことがあるから持ってるんじゃないの？」
どんどんと光が失われているし、あの桔梗が発したとは思えないくらい低くて重い声だ。
「私は初めてだったのに、お兄ちゃんが初めてじゃないとか嫌だよ。お兄ちゃんの初めてを奪った女をぶっ殺したくなる」
話には聞いていたが、この世界で初めて聞く桔梗の暴言。
アニメでは画面越しだったからそこまでじゃなかったけど、実際に見ると恐怖を覚えそうになるくらいだ。
「お兄ちゃんの初めてを奪った女は誰？　今すぐ殺しに行くから」
本当に殺しに行くんじゃないかと思えるくらいに、桔梗は怒り狂っ

ている。
普通は童貞の男がアフターピルなんて持ってはいないだろうから、勘違いしてもおかしくはないか……。
桔梗を抱いた後に病院行って貰ったとかならすぐ納得するだろうが、これは一筋縄じゃいかないかもしれない。
「俺の初めては桔梗に捧げたよ」
これは嘘偽りない言葉。
前世でも童貞だったし、この世界でも桔梗を抱くまで童貞だった。
「本当？　でも、お兄ちゃんやたら上手かったよね？　他の女を抱いたことがあるからじゃないの？」
これだけでは納得してくれない。
俺が童貞だったことなんて確認のしようがないし、どう納得させればいいんだろうか？
桔梗を絶頂させることができたのは能力のおかげであって、俺が上手いからではない。
「本当。俺は桔梗を愛してるから」
怒り狂っている桔梗を収めるために、俺は抱きしめた。
そうしたら少しだけだけど、瞳に光が戻ったように思える。
今の桔梗は俺に愛されたいという欲求で溢れているから、こうしてあげるのがいいと思った。
「桔梗があんなになったのは、身体の相性が良かったからだよ」
快感に変換されているのもあるが、明らかに身体の相性は抜群。
俺も獣のように桔梗に種付けしたし、他の人とはこうはならないだろう。
「うん……わかった。信じる。でもね……」
突然押し倒され、桔梗は俺に覆い被さった。
「私はお兄ちゃんの全てを独占しないと気が済まない。だから今度は私がお兄ちゃんを犯してあげる」
どうやら桔梗はヤンデレのようだ。
ヤンデレのが依存してくれるからいいんだけど、他の女の子と話しただけでもヤバいことになるだろう。

「お兄ちゃんを私しか見えないようにしてあげるよ。あはっ、お兄ちゃんのおちんちんもう大きくなってる」
桔梗の裸を見たら、誰だって勃起する。
昨日、あんだけしたのに、どうしようもない息子だ。
俺のを見た桔梗は手でしっかりと握りしめ、大きくなったソレを上下に擦った。
「熱くてドクドクしてる。別の生き物みたい」
俺のことを見つめ、擦るのを早くした。
自分でするのとは別の気持ち良さがあり、それを察した桔梗が不敵な笑みを浮かべる。
「確か口でしても気持ち良くなれるんだよね？」
桔梗は肉棒を口に含む。
まるで膣内に入っているように熱く、ねっとりとしている。
「んん、じゅる……んくぅ……」
口の中はとても気持ちよく、少し刺激されただけで蕩けてしまいそうだ。
初めてで少しぎこちない感じがあるが、俺を気持ち良くさせようとしているのがわかる。
「ちゅるっ、ちゅっ、ちゅぴっ、んふぅぅ……っ」
フェラチオの音はとてもエロくて、してもらうのが病みつきになるかもしれない。
もう少し奥まで咥えてほしいが、これ以上は難しいか……。
それでも射精させるには問題なく、どんどん気持ち良さが増していく。
桔梗は俺を虜にさせようと、舌を使いながら肉棒を刺激する。
「うっ……出る……」
「んん、じゅる……んんん――」
他の人の何倍もの量の精液が一瞬にして口の中を満たしていく。
それに驚き桔梗は離れようとしたが、全部出したいから俺は桔梗の頭を抑えつける。
「んん……んく、ごく……ごほ……」

口は塞がれているから飲むしかない。
ねっとりと濃厚な精液は喉でひっかかったのか、桔梗は少し辛そうにしている。
「んく、んくぅ……んちゅ……」
尿道内に残っている精液を吸出して、それも飲んでくれる。
「ふふ、ごちそうさま」
あくまで今回は桔梗が主導権を握りたいようだ。
「次はこっちだね」
桔梗は俺の肉棒を手に持ち、自分の膣にあてがった。

5話

「お兄ちゃんをもっと私の虜にしてあげる」
桔梗は俺に馬乗りになっている状態で、腰を沈め肉棒を膣内に飲み込ませていく。
「はぁん……大きい……」
ゆっくりと挿入させていき、桔梗の膣が俺の肉棒を全部飲み込んだ。
主導権を握りたい桔梗であるが、入れただけで身体を大きく震わせてしまう。
「ほら、早く動かして気持ち良くしてよ」
「んん……わかって……ふにゃぁぁん」
挿入している状態で動かないのは無理なので、俺は桔梗の腰を掴んでから自分で腰を振る。
もちろん快感に変換させる能力を使っており、桔梗はすぐに絶頂に達した。
「ひゃぁん、イったばっかりたから、待っ……ひいいいん」
全てが快感になる桔梗に主導権を握るのは無理な話で、俺が主導権を握らせてもらう。
多分どんなにSな人でもこの能力の前ではMになり、快感を求める性奴隷に成り下がる。
「あ、ダメ……イく……イくイくイくうぅぅ……」
下から激しく突かれた桔梗は、簡単に絶頂に達してしまう。
「ひゃぁん……こんなの、我慢できないよぉ……いい、お兄ちゃんのおちんちんいいよぉ……ふあぁぁぁぁん」
一突きされる度に絶頂してるんじゃないかと思われ、桔梗は俺に屈服してしまった。
このモードの桔梗でこうなったのだから、もう反抗的な態度を取るなんてことはない。
そして俺の言うことは何でも聞いてくれるだろう。
低かった声がいつも通りあざとさを感じられる高い声に戻った。

「桔梗は誰のもの？」
「はぁん……私は、お兄ちゃんのもの……イく、イくぅぅ……」
「桔梗を抱いていいのは？」
「あ、あぁん……お兄ちゃん、だけ……イく、イくイくイくぅぅぅん」
「いつでも抱かせてくれる？」
「うん……いつでも、はぁん……どこでも、抱いて……ふあぁぁぁぁぁん……」
俺の質問に答えながらも、絶頂に達してしまう桔梗。
全身をビクビクと震わせ、昨日同様に快感を求めている。
結合部からは絶え間なく愛液が溢れ、まるで肉棒が美味しすぎてよだれが垂れているかのようだ。
「あ……何で突いてくれないの？　いっぱい突いてよぉ……」
俺が腰を動かすのを止めると、突いてとおねだりをしてきた。
「桔梗からは動かないの？」
「無理だよ……力入らなくて動けないのぉ……」
快感に溺れてしまった桔梗には、自分から腰を振るのは無理なようだ。
「いっぱい突いて、精液をビュッビュッって子宮に出してほしいのぉ……ひゃぁぁぁぁん」
そんなことを言われて動かないのは無理な話で、激しく突いていく。
要望通り、子宮がパンパンになるまで出すことにしよう。
さっきから突かれて上下に揺れている乳房を鷲掴みにし、乱暴に揉む。
「ふあぁん……痛いけど、これがいいのぉ……ひゃあぁん……」
どんな痛みも快感になる桔梗には、乱暴にする方がちょうどいい。
俺がSで桔梗がMという構図が出来上がったので、今後は色々としていこう。
「ほら、出すよ」
「はぁぁん……出して、子宮がいっぱいになるまで出して……あ、イく……ふあぁぁぁぁん」

桔梗が絶頂に達したと同時に、俺の肉棒から噴水の如く精液が吹き出した。
昨日から何回も出しているにも関わらず、衰えを知らない。
膣壁がぎゅうぎゅうに締め付け、最後の一滴まで絞りとろうとしてくる。
「お兄ちゃんの精液熱い……出されながらイくぅ……」
精液を出される快感にも溺れ、最後はアへ顔を晒しながら絶頂に達した。
俺は挿入したまま上半身だけお越し、桔梗を抱きしめる。
「お兄ちゃん、好きぃ……永遠に離れなれないよぉ……」
桔梗もわかっているのだろう、俺以外の人としてもこんな風にならないということを。
セックス依存症ではあるが、それ以上に俺に依存しているから、絶対に離れることなんてできない。
桔梗の花言葉である永遠の愛……名は体を現すというが本当にそうだ。
「桔梗が潮を吹きまくったから俺の身体がびしょびしょだ。お風呂行こうか」
「うん……ひゃあぁん」
繋がったまま抱き抱えたら体重でさらに奥まで入ったのか、桔梗は身体を大きく反らした。
俺はそのままお風呂場へと向かう。
☆　☆　☆
「はぁぁん……んん、ひぃぃん……」
挿入したままシャワーを浴びているからか、桔梗はさっきから絶頂が止まらない。
流石に抜こうとしたのだが、桔梗が「抜いたら精液が溢れるからやだぁ……」言ってきたからそのまま。
そんな状態だから自然と腰が動き、中々身体が洗い終わらない。
「もう無理」
「え？　ふあぁぁぁぁん」

俺は桔梗を四つん這いにし、バッグで激しく突いていく。
挿入していては桔梗に種付けすることしか考えられないし、彼女だってそうだろう。
「ひゃあ、ひゃん……あ、あん、ああん……ひゃあぁん」
まるで獣のように腰を振り、お互いに快感だけを求める。
「ほら、孕めよ」
「ひゃい……孕むのぉ……お兄ちゃんの精液で孕むのぉ……イ、イくぅぅぅぅん……」
大量射精は本当に凄まじく、消防車のポンプのごとく発射されていく。
「はぁぁん……気持ちいいよぉ……」
絶頂しすぎて足がガクガクとして、桔梗は立っていられなくなる。
その時に肉棒が膣から抜け、たまっていた精液が溢れ出る。
「やぁ……精液溢れるやなのぉ……」
どうしても中に精液をとどめておきたいのか、昨日同様に指で戻そうとする。
「いや、出さないとまずいでしょ」
昨日から出しまくっていた影響で桔梗の下腹部が少し膨れており、これ以上ためておくのはよろしくない。
「やぁ……ふあぁぁぁぁん」
俺は膣内に指を入れ、精液を吐き出すように動かした。
子宮に届いているのには出すことはできないが、膣内にあるのは出しておこう。
「ふにゃあぁん……イく……ひゃぁぁぁぁん」
精液を出すための手マンされて、桔梗が絶頂しまくったのは言うまでもない。

6話

「お兄ちゃん、好き好き好きぃ」
シャワーを浴び終わり、俺は桔梗とイチャイチャしている。
俺は普通の部屋着、桔梗は俺のワイシャツを着たいとのことで着させた。
彼シャツというのを味わってみたかったのだろう。
体格差があるからブカブカであるが、これはこれでそそられる。
特にシャツから出ているスベスベの太ももがとてもセクシーだ。
ちなみにアフターピルは飲ませているので、もう妊娠の心配はない。
「今日は買い物に行こうと思ったけど、難しそうだから止めるか」
「うん……ごめんね」
難しい理由は桔梗がイき狂って歩くのもしんどいから。
別に日用品などは通販で買えるからすぐに買う必要もない。
ご飯もレトルトや冷凍食品があるし、今日は外に出なくても問題はないだろう。
俺1人で行くこともできるが、イチャイチャしたいから離れたくない。
「そういえばお兄ちゃんは今はどうしてるの？　今は大学生？」
「そうだけどしばらく行くの止める」
高度育成高等学校はAクラスで卒業したら、自分の希望する進路に進むことができる。
俺はそれを利用して一流大学に進学したが、桔梗とイチャイチャしたいからしばらく引きこもるつもりだ。
「いいの？」
「うん。桔梗とイチャイチャが最優先だから」
「嬉しいな」
桔梗は俺に身体を擦りつけ、本当に離れない……というか離れることを忘れてしまっているかのようだ。
「お金はどうしてるの？　やっぱり仕送り？」

この世界で目覚めてからそう時間がたっていないため、俺はもちろんバイトなどしていない。
仕送りだけで生活するとなると、二人分は厳しいと思ったのだろう。
「実は親が死んじゃってね……その時に出た生命保険のお金で暮らしてる」
この世界に来る少し前に事故で両親を亡くしており、今の俺には家族がいない。
記憶にはあるとはいえ実際に話したことがあるわけでもないから、特に思うことはない。
生命保険で得たお金はかなりあるので、数年は働かなくても贅沢できるほど。
「そっか……」
「俺は大丈夫だから。桔梗が側にいてくれれば寂しくない」
「うん。ずっと一緒にいるよ」
自然とキスをした。
「んん、んちゅ……じゅる……んくぅ……」
軽いキスで終わるわけもなく、俺たちは舌を絡ませ合う。
このままだとまたセックスしてしまいそうな勢いであるが、そんなことはどうでもいい。
今はしたい時にする。ただそれだけだ。
「ぷはぁ……お兄ちゃん、しよう？」
先に桔梗が発情し、セックスのおねだり。
もちろん断ることなく、桔梗の胸を優しく触っていく。
「いやぁ……もっと激しく触ってよぉ……」
俺により与えられた快感でドMになった桔梗は、優しくでは物足りない。
もっと乱暴に触られ快感に溺れたいのだろう。
それに応えて、俺は強く乳房を触る。
「はあぁん……これが、これがいいのぉ……」
普通なら痛いと思うくらいだが、桔梗にはこれくらいじゃないと物

足りない。
俺はワイシャツのボタンを外し、さらに乱暴に揉んでいく。
どうせすぐ脱ぐからとブラは着けさせなかったが、本当にその通りになった。
「ひいいいん……もっと、もっと痛くしてよぉ……」
あり得ないほどドMと化した桔梗からさらにおねだり。
「ひゃぁ、ふあぁぁぁぁん……」
胸が引きちぎれるんじゃないかと思うくらい強く引っ張ると、桔梗は痛みで絶頂に達した。
「俺も気持ち良くしてよ？」
「うん。口ですればいいのかな？」
「桔梗の大きさなら挟めるんじゃない？」
胸を触り、パイズリしてほしいとアピールする。
「はぁん……わかったよ」
既に勃起している肉棒を出すと、桔梗は言う通りに胸を挟む。
大きすぎて全てを包み込むのは無理だったが、膣や口とはまた違った感触で気持ち良い。
「んん……ふあぁ……」
胸を手を使って上下に動かし肉棒を刺激しつつも、桔梗は感じている。
たまに当たる乳首がアクセントになって、これは病みつきになりそうだ。
どうせ毎日セックスすることになるのだし、パイズリやフェラも毎日してもらおう。
「口の中に出したいから咥えながらしてよ。舌での刺激も忘れずに」
「うん。あむ……じゅる、れろ……」
亀頭を口に含み、激しく刺激してくる。
どうやら俺は膣内射精、口内射精が大好きのようで、この先も絶対ゴムなんてつけたくない。
桔梗自身は妊娠するのを望んでいるので、ゴムなんてつけてほしくないだろう。

それどころかさっきはアフターピルを飲むのも少し嫌がったほどだ。
口の中に出されるのもそのうち慣れるだろうから問題はない。
「出すよ」
「うん……らして……んんんん――」
大量の精液が桔梗の口の中に流れ込んでいく。
今日だけで４回目の射精になるのだが、本当にあり得ないほどの量。
「んん……んくぅ……ごく……んぐ……」
俺はフェラの時と同じように頭を抑えており、桔梗はまた精液を飲んでいく。
頭を抑えなくても飲んでくれるだろうが、セックスの時は少し乱暴にしたくなる。
そうされることを本人が望んでいるというのが一番だけど。
流石の俺も嫌がったら、女の子を乱暴にしたりしない。
「お兄ちゃんの精液美味しいよぉ……あむ、じゅるる……」
桔梗は再びパイズリフェラを開始するのであった。

7話

「ひゃあ、ひぃ……イくぅぅぅん」

夜。既に射精した回数が二桁に達しているのにも関わらず、桔梗を犯し続けていた。

大量射精の影響で精液の生成が多いためか性欲が強いようで、体力がなくなるまでしてしまうだろう。

最もお互いに体力の限界が近いから、今日はこれで最後になりそうだ。

「あ、らめ……またイく……ふあぁぁぁぁん……」

桔梗が絶頂したと同時に俺も果てた。

ドクドクと脈うっている肉棒とシンクロするように、桔梗は身体を震えさせている。

「中らしが一番気持ちいいのぉ……はぁぁん……」

俺に種付けされている時が一番幸せのようで、アヘ顔ながらに満足そうだ。

今の桔梗は俺に抱かれることで幸福を感じており、これからも沢山求めてくるだろう。

「やぁ……抜いちゃやなのぉ……ずっと入れててぇ……」

抜こうとしたら、桔梗は腕と足を背中に回してきて大好きホールドの形をとった。

力があまり入っていないから無理矢理ほどくことはできるが、桔梗が望むならこのままでいる。

射精しても未だに勃起しているからまだやれるけど、これ以上してしまうと本当に桔梗が壊れてしまう。

俺も突き過ぎて腰がしんどいので、動きたくはないが。

「桔梗の全ては俺のもの。身や心はもちろんのこと、これからは過ごす時間も全て……」

「うん。私の何もかもお兄ちゃんに捧げるよ……はぁん」

挿入されたままだと感じてしまうのか、動いてもないのに桔梗は身体を震わせる。

俺もどう考えてもヤンデレであるが、桔梗がそれを望んでいるから問題はない。
「桔梗にマーキングしよ」
「うん。いっぱいして？」
俺は首筋の髪をどかしてから、そこに思い切り噛みつく。
「ひゃあ、はあぁん……痛気持ちいいよぉ……イくぅ……」
噛まれて桔梗は絶頂に達したが、俺は噛むのを止めない。
それどころかさらに力を入れて噛み、消えることのない印をつけていく。
「あぁ……また、イく……あぁん……」
挿入されているのと噛まれている痛みによる快感で、桔梗の絶頂が止まることがない。
「ふあぁ……ひぃ、ひゃぁぁぁぁん」
桔梗の喘ぎ声を聞いていたら自然と腰が動いてしまう。
壊してもいいから桔梗に種付けしたいという衝動が襲い、本能のままに桔梗を犯していく。
もちろん首には噛みついたままだ。
「あ、あ、……イぐのが止まらにゃいよぉ……ふあぁぁぁぁん」
首と膣の二ヶ所を刺激され、桔梗は先ほどより盛大に絶頂した。
俺の腰もかなりガクガクとしてあまり力が入らないが、そんなことはどうでもいい。
今は桔梗を孕ますことしか考えられず、本当に自分が獣のように思える。
俺もセックス依存症になっており、これは大量射精の副作用だろう。
異常なまでに性欲が強くて、これから桔梗を犯して犯し尽くす。
一度セックスの気持ち良さを知ってしまっては、どうあっても止めることができない。
「ごめん、入れたままだと止まらない。桔梗を壊しそうになる」
「ひゃい。お兄ひゃんになら壊しゃれてもいい……もっといっしゃいしてぇ……ひゃぁぁぁぁん」

また噛みつき、桔梗は再度絶頂に達した。
桔梗自身も快感を求めて俺に犯されるのを望んでいる。
お互い相手に依存しており、この先何があっても離れることができない。
だから他の人を抱くことなんて絶対にないし、それは桔梗も同じだろう。
俺は桔梗を桔梗は俺だけを求め、本能の赴くままに快楽に身を任せていく。
「もう限界だから今日はこれで最後。そらイけ」
「ふあぁ……イく、お兄ひゃんにイかしゃれる……ひゃぁぁぁぁん」
桔梗は潮を吹き、俺は精液を吐き出す。
それと同時に力いっぱい首筋に噛みつき、出し尽くすまでそのままの体勢でいる。
「くっきりと歯形がついたよ」
「はぁぁぁ……嬉しい……」
うっとりとした表情で歯形を触り、桔梗は幸せを噛みしめている。
まだ少し呂律が回っていないが、壊れるということはなかったようだ。
本当に壊してしまうのは嫌なので自重したいけど、それは無理だろう。
セックスをするとお互いに理性が飛んでしまうのだから。
「桔梗、愛してる」
「うん。私もお兄ちゃんのこと愛してるよ」
そのまま抱き合い、幸せな想いを感じて眠りについた。

8話

同棲を初めて3日目、俺と桔梗は買い物のために外に出ている。
起きてからまた桔梗を犯したい衝動にかられたが、何とか我慢した。
だから帰ったら桔梗を犯しまくることになるだろう。
「犯しまくってたから弄ってないだけかもしれないけど、桔梗って携帯持ってる？」
会ってから一度も使っていることを見たことがない。
高度育成高等学校では専用の携帯だったし、入学するにあたって元から持っていた携帯は在学中は外部との連絡をたつから使えないため、解約していて今は持っていなくても不思議ではない。
「ううん、持っていないよ……」
「そか。ＳＮＳを含めて他の男と連絡しないと約束してくれるなら、俺が契約してもいいよ」
「本当？」
「うん。愛してる桔梗のためだから」
「ありがとう」
俺にだけに見せる飛びっきりの笑顔を浮かべてくれた。
携帯を契約してくれるからじゃなくて、俺に愛してると言われたから見せてくれた笑顔だろう。
「じゃあ、行こうか」
「うん」
俺の腕に抱きついて胸を押し付けてくる。
このまま襲いかかりたくなったが、我慢して携帯ショップに向かった。
少し前屈みになりながら歩くことになったのは言うまでもない。
☆　☆　☆
「んん、んちゅ……じゅる、はぁん……」
携帯を契約し、買い物を終えた俺たちはラブホテルに入った。
ずっと胸を押し付けられて我慢できなくなり、家に帰るよりラブホ

のが近かったからここにしたのだ。
部屋に入った瞬間にキスをして、桔梗の身体を触っていく。
「まずは一発目」
「うん……ふあぁぁぁぁん」
ショーツをずらしてそのまま挿入すると、やっぱり桔梗は絶頂してしまう。
中は既に愛液で潤っており、入る前から期待していたようだ。
ドアの前で立ちながら挿入なんて家では絶対にしないがここはラブホテル……さして問題はないだろう。
桔梗は入れられただけで立つのがしんどくなって、俺にもたれかかっている。
「立ってるの無理なら足を背中に回して。抱き抱えるから」
「うん。ひゃぁぁぁぁん」
沢山ついてるから子宮口が緩くなったのか、抱き抱えたら俺の肉棒が子宮口をこじ開けてしまった。
そのせいで桔梗にはさらなる快感が襲い、また絶頂に達する。
「ふあぁ……気持ち良すぎて、止まらないよぉ……」
子宮口を開けられた状態はずっと快感になっているようで、身体の震えが止まらない。
これで突いたら桔梗は間違いなくイき狂ってしまうだろう。
「こんなの無理ぃ……壊れちゃうよぉ……ひゃあん」
「壊れろよ」
「ひゃい……壊れる、お兄ひゃんに壊されちゃいのぉ……」
もう桔梗はアへ顔になっており、既にイき狂っていた。
普段ならもう少ししないと呂律が回らなくならないが、新たなる快感でまともに喋れていない。
「ひい……ひゃあん、やん……あ、あぁん……」
駅弁で突くのは結構しんどいが、ここままの状態で1回出してみたい。
「ほらイき狂え」
「ひゃいぃぃ……イくぅぅぅん」

能力によってイき狂っている桔梗であるが、もし能力を解除したらどうなるのだろうか？
少なくともこんな風になることはなく、普通のセックスになるだろう。
イき狂わなくても俺から離れることはないだろうが、セックスに依存しているから物足りなくなるかもしれない。
だから能力を解除するつもりはないし、ずっとイき狂わせつもりだ。
「永遠に桔梗を離すつもりないから」
「ひゃい。私も離しゃない。永遠にお兄ひゃんと一緒にいるのぉ……ひゃぁぁぁぁん」
またこんなことを言ってしまうのは、俺が本気で桔梗を独占したいから。
俺の能力を使えば桔梗がいなくたって、出会い系で援助交際している女の子を捕まえて快感に溺れさせ依存させることはできるだろう。
でも桔梗以外の人とセックスしたいと思わないし、桔梗もそのつもりだ。
年をとってセックスしなくなっても、桔梗のことを離す気はない。
「そら子宮にぶっかけるぞ」
「ふあぁん、らして……お兄ひゃんの精液をびゅるるって子宮にらしてぇ……あ、イくぅぅぅん」
子宮口が開いたから直接子宮に精液を出していく。
「次はこっちだ」
出しても萎えない肉棒を桔梗の口に突っ込み、腰を動かしていく。
「んん、じゅる……んちゅ……んくぅ……」
普通にフェラしてもらうより気持ち良く、止めることができない。
巨根を口に入れられ少し苦しそうにしている桔梗であるが、イラマチオの苦しさも快感に変わるようで、身体を震わせている。
このまましていれば間違いなく絶頂するだろう。
「じゅる……んふ、ずちゅる……ん、んんん――」
イラマチオで本当に絶頂してしまった。

こんな大きい物を入れられたら苦しいだけだろうに、本当にこの能力は凄い。
「出る」
「ん、んんんん――」
中出ししてから数分後、次は口の中に出していく。
「まだ飲んじゃダメだからね」
口の中に精液をためさせている間に、俺は鞄の中からアフターピルを取り出す。
「これと一緒に飲んで」
精液がたまった口の中にピルをいれ、桔梗は精液と一緒に飲んでいく。
「んくぅ……ぼこ、ごくごく……」
ねっとりとした精液は飲むのが辛いが、一生懸命飲んでくれる。
「飲んだら口の中見せて」
「うん。うあぁ」
きちんと全部飲んでくれて、桔梗は口の中を見せてくれた。
「ラブホだと時間が限られるから、どんどんしていこうか」
「はあぁん……嬉しい」
うっとりとした表情で俺のことを見て、またセックスを楽しむのであった。

9話

「何か恥ずかしいね……」
このラブホにはコスプレ用に色々な衣装がレンタル可能だ。
メイドやナース、学生服など結構種類が豊富で、この中から一つ選んで桔梗に着せた。
「学生服なんて最近まで着てたんだから恥ずかしくないでしょ」
俺が着させたのは学生服で、赤いブレザーは高度育成高等学校の制服に似ている。
「学校では着てたけど、ラブホで着るなんて思わないよ……」
桔梗は頬を紅潮させており、恥ずかしいのかスカートの裾を手で抑えていた。
「だって桔梗の制服見たことなかったし」
「それはそうだけど……」
桔梗の中学入学直前に俺は高校の寮に行ったために、彼女の制服姿を見たことがない。
今は学生じゃないためにコスプレになってしまうが、桔梗の制服姿はとても似合っている。
今すぐ襲いかかりたいが桔梗のコスプレなんて滅多に拝めないため、俺はしばらく見ることにした。
衣装自体は安く買えるため、今度通販で購入して家でも着てもらうことにしよう。
「可愛い」
「うぅ～……」
初体験の時より顔を真っ赤にしてるくらい顔が赤く、桔梗を苛めたくなる。
俺は桔梗の肩に手を置いて引き寄せ、ベッドまで連れていく。
「んちゅ……じゅる、はぁん……んく……」
キスをしながら押し倒し、ブレザーのボタンを外す。
せっかくのコスプレなので脱がすようなことはせず、このまましていくつもりだ。

洗濯で落ちない汚れがついたり、破ってしまうと買い取りになってしまうから、そこだけは気を付けなければならない。
「ふあぁ……本当に恥ずかしいよぉ……んちゅ、んん……」
ブラウスのボタンを外すと、桔梗が恥ずかしくしている原因がわかる。
乳房を覆うはずのブラはほとんど隠しておらず、勃起している乳首は丸見え。
しかも布はかなり薄いために、ブラとしての機能を果たしていない。
ちなみに下着は制服をレンタルした時に上下セットで購入した物で、これは持ち帰ることができる。
思っていた以上なので、こういったエロ下着も衣装と一緒に買おう。
「俺に辱しめられるの好きでしょ？」
「はあぁん……大好きぃ……」
スイッチが入って発情したようで、蕩けた表情になる。
こうなったら俺に中出しされるまで発情がおさまることはないだろう。
「どうしてほしい？」
「犯すように乱暴にしてほしいのぉ……」
ドMの桔梗は俺に犯され願望を持っておる。
恋人同士がするような愛のある優しいセックスじゃなくて、限りなくレイプに近いような乱暴なのを望む。
もちろん犯すようにしても愛はあるけれども。
「じゃあ、桔梗がエロい下着をはいているとこを俺に見られて犯される設定でやってみる？　嫌、嫌言いながらも快感に負けて堕ちていく」
「無理ぃ……気持ち良すぎて嫌とか言えないし、お兄ちゃんには演技でも言いたくな……ひぃぃぃぃん」
あまりにも可愛すぎて思わず乳首を思い切り引っ張る。
「ひゃあ、あぁん……んん、んちゅ……じゅる、んくぅ……」

乱暴にしながらも愛してる証としてキスをしていく。
犯されるようにされたいといっても、桔梗は俺に愛されたい気持ちでいっぱいだ。
だから、ただセックスするだけじゃなくて、濃厚なキスをして愛を実感させる。
「エロいパンツはどうなってるのかな？」
スカートをめくり、購入したショーツを見た。
ブラと同じで大事なとこを隠しておらず、愛液によってトロトロの膣が丸見え状態。
「はあぁん……お兄ちゃんに見られるだけで気持ち良いのぉ……」
見られる快感に襲われ、愛液がどんどんと溢れてくる。
まるで身体中の水分が膣に集まっているかのようだ。
「もう我慢できないよぉ……お兄ちゃんのおちんちんで、私のおまんこを犯してぇ……孕むまで精液を出し続けてよぉ……」
最初は制服を着て恥ずかしがっていたが、今は快感堕ちしたセックス依存症の女にしか見えない。
実際に依存してはいるのだが。
「いっぱい入れてたっぷり出してあげる」
「うん。ふあぁぁぁぁん」
俺は全裸になりギンギンに勃起した肉棒を膣に突っ込み、桔梗を絶頂させる。
「はあぁん……お兄ちゃんに犯されるの好きぃ……ずっとこうされていたいよぉ……」
どんだけされたいんだよ？　と思ったが、俺がこうさせたので桔梗の願いはなるべく聞くようにしよう。
こんなに依存させてもまだ足りない……もっともっと俺に依存させたい。
「いっぱい犯してあげるから、桔梗もっとずっと俺だけを求めて」
「ひゃい……お兄ひゃんだけを求めるよぉ……あ、イく……ひゃぁぁぁぁん」
盛大に潮を吹きながら絶頂に達するが、ずっと犯してほしいという

ことで止めることはしない。
本当に服を脱いでおいて良かった。
脱いでなかったら服が濡れてラブホに泊まることになっていただろう。
「どこに出してほしい？　たまには顔とかにぶっかけようか？」
「やぁ……中じゃないとやなのぉ……イくぅぅぅん……」
演技でも嫌とは言えないと言っていたのに、普通に言われてしまった。
まあ、元から中に出すからいいのだけれど。
他のことで嫌と言ったらお仕置きを与えることになるだろう。
「ふあぁ……お兄ひゃんの精液で孕みしゃいのぉ……子供を産みしゃいのぉ……あ、ふあぁぁぁぁぁん……」
桔梗の絶頂と同時に、要望通りに中に精液を出していく。
アフターピルを飲んでいなくて、排卵日が近かったら、間違いなく妊娠するだろう。
「ああん……幸せ……もっともっとらしてほしいよぉ……」
愛する人に膣内射精され、桔梗はアヘ顔ながら幸せを噛みしめている。
「じゃあ、帰ったら寝るまで犯しつくしてあげる」
「はあぁん……嬉しすぎて蕩けちゃうよぉ」
「どこかデートに行くのと、家でずっと犯されるのとどっちがいい？」
「どっちもいいけど、お兄ちゃんに犯されてるのがいい」
普通ならデートって即答すると思うが、桔梗は違った。
俺に犯されるのが一番の幸せであり、この先も変わることはないだろう。